

昭和34年 「山田開進堂」の雑誌販売・購読から見えてくる常呂町の世相

「山田本店文書」の1つに、昭和34年3月15日から5月31日までの2ヶ月半にわたり山田開進堂が日々販売した文具や書籍などの売り上げを記録した「当座帳(売上台帳)」があります。

今回、その売上台帳から雑誌のみを取り出し、当時の町内における雑誌の購読傾向や内容を分析することで、そこから見えてくる当時の世相を振り返ります。

1. 山田広子さんの話

当時、開進堂を経営していたのは、山田芳夫さん（昭和3年生まれ・故人）と妻の広子さん（昭和7年生まれ）の2人です。

*山田広子さんに幼い頃からの思い出と昭和27年から昭和35年頃にかけて開進堂が扱っていた「雑誌」に関する思い出を伺いました。話の概要は次のとおりです。

私は岐阜の農家に生まれました。小学校は錦水尋常高等小学校です。

昭和11年12月に鑑沸尋常小学校と岐阜尋常小学校が統合し、錦水尋常小学校が現在地に開校しました。

それまでの古い校舎（西5線6号）は青年道場として青年団やいろいろな集會に使用されていました。

小学校の思い出として運動会があります。私は足が速く、小学校の運動会では鉛筆やノートの景品を毎回もらい、買ってもらった記憶はありません。

高等科の頃、陸上競技に熱心な先生の厳しい指導を受け、網走で開催された陸上大会に出場する常呂村女子チームの選手として、錦水からは私と大村さんの2人が選ばれました。やったことのない砲丸投げや走り幅跳びなどの競技もありましたが、常呂村女子チームが1位になったことは今でも覚えています。

高等科（現在の中学2年）は昭和14年に新たに設けられ、高等科を卒業した昭和22年に新制中学校が生まれ、錦水中学校の3年生に編入し、翌年卒業しました。当時、教室がなかったので、授業は職員室で受けていました。

中学を卒業してからは家業の農業の手伝いをしたり、青年団活動をしました。青年団活動では農閑期の冬に行う花札の他に下の句カルタ大会が記憶にあります。カルタ大会は青年道場（青年会館と言っていました）を会場に、ずいぶん盛んでした。岐阜の大会ばかりではなく豊川などあちこちへ遠征する青年団同士の大会もありました。

また、角橋（現在の第2.4橋）近くの武藤さんという家で和裁を習い、その後、青年会館で洋裁を習いました。能取の国分さんという方が教えに来ていました。洋裁は役立ち、新婚旅行にも着て行ったワンピースやラシャのコートなどいろいろな服を自分で縫って作ったものです。ラシャの生地は、当時実家で飼っていた綿羊の毛を紡いだものと交換して手に入れたものです。当時作って袖を通さないまま今もタンズに眠っている洋服が何枚もあります。

私は昭和27年に結婚することになっていましたが、同年1月10日に大正時代建設の旧開進堂が火事で焼失したため、1年遅れの翌28年3月21日に結婚しました。

火事を知ったのは、洋裁を習っていた青年会館で聞いたサイレンの音と農協が設置したラジオ共同聴取施設（注：昭和25年から各地区に設置し、岐阜地区は同年3月

施設完成)の放送でした。どうすることもできず、そのまま自宅に帰った覚えがあります。

この火事で夫の兄・憲一が札幌から戻り、山田組という建設会社を興し、現在の開進堂を同年建設しました。

結婚式は、山田家の親族が私の実家に来て、「婿入り」の披露宴を2階で行い、そのまま実家の親族と花嫁姿の私、嫁入り道具(鏡台や桐のタンスなど)を積んだバチバチという馬そりで山田家：開進堂まで折り返し、そこで再び「嫁入り」の披露宴を行うという一日がかりの大きな行事でした。現在の店舗スペースの右側が茶の間、その奥が仏間で、披露宴はその2部屋を通して行い、私の父が謡曲をたしなんでいたのので謡(うたい)を披露し、喜ばれました。

(注：『共立百年史』にも昭和初期の地区内結婚式のこととして、「当時の結婚式はほとんどが冬期間に、両家を馬そりで往復したもので、嫁の家に昼時に婿入りし、嫁の家ではこれが立ち振る舞いで、夕方に婿の家に嫁入りしたものです」と綴っています)

結婚式の時期が3月末で教科書の販売で忙しかったこともあり、新婚旅行は夫の兄の勧めで5月に登別へ行きました。

その頃の開進堂は、大正時代から続く教科書販売や書籍、おもちゃ、万年筆などの文房具や各種雑貨も販売する店でした。

当時、雑誌は国鉄湧網線で運ばれてきたので、発売日に合わせて常呂駅まで夏はリヤカー、冬はそりで受け取りに行きました。雑誌は住宅兼用の店の中で雑誌ごとに仕分け作業をしていました。

昭和30年代中頃の常呂町は1万人以上の人口があり、子どもの数も多く、大人も子どもも雑誌を読む人が多い時代でした。

雑誌はタイトル数が多く、配達が主流だったので仕分けが大変でした。特に当時の雑誌、少年誌や婦人雑誌は付録がたくさんあり、付録は雑誌本体とは別に梱包されてくるので、雑誌本体に付録を挟み入れ、ひもで縛る「付録合わせ」という作業に手間取り、本当に大変でした。

雑誌の配達は、夫が免許を取るまでの間、常呂高校(当時は定時制で昼・夜の両課程があった)の生徒をアルバイトで雇い、自転車で配達していました。

昭和36年に夫がオートバイの免許を取ってからは夫が配達をするようになり、昭和40年には自動車の免許も取りました。ただ、北見へ行くために湧網線で網走、そして北見、駅から自動車教習所という往復の毎日は夫も私も負担でした。

記憶にあるのは、取次への返本を木箱に詰めて送り返したことです。木箱が重く苦労しました。常呂駅まで受け取りに行った本や雑誌がどのような梱包だったのかは覚えていません。

本の取次(問屋)への返本は、決められた期間内にしないと店の売り上げになってしまい、支払いが増えてしまいます。ですから夫が北見へ免許取得で通っている間は作業の時間が限られ、その上に売上台帳やら伝票記入などの仕事が重なり、特に大変だった思い出があります。

注：山田開進堂は、山田久七商店(現在の山田本店)の支店として、大正元年(1912)現在地に開業し、教科書販売や新聞の販売・配達をしていました。

開業当時の写真には、「北海タイムス」「小樽新聞」の看板とともに店先に数人の新聞配達をする人たちが自転車とともに写っています。（「常呂村史」には、大正3年、山田甚太郎が自転車購入、漸次、使用者増加」の記録があります）
 注：『日吉小学校60周年記念誌』に、手師学尋常小学校初代校長が大正8年から12年までの在任期間の思い出を綴った文に「…その当時、教科書（国定）購入のため常呂村市街の山田書店（注：山田開進堂）まで歩いて行ったものです。1冊の価格は5銭くらいだったと思う。途中の道が悪く、山田さんにお願ひし、馬で手師学（日吉）まで1日ばかりで来てもらひ、熊の心配もいづらか楽になりました」の記述があります。



大正3年頃の山田開進堂



昭和27年建設の山田開進堂

- *上：腕組みをしているのは店主の山田芳夫氏
- *左：店頭の自転車は配達用で、自転車の荷台に荷物を入れているのはアルバイトの常呂高校生徒
（山田広子さんの証言）

2. (資料1)「山田開進堂の雑誌販売状況（昭和34年3月15日から5月31日まで）」と当時の常呂町のさまざまなデータを組み合わせると、大雑把には次のように分析することができます。

- (1) 常呂町の人口がもっとも増えた時代で、幅広い雑誌の購買層があった。
- (2) 戦後15年近く経ち、給与所得が向上し、雑誌の購買力が高まった。
- (3) 雑誌の購読タイトル数が予想外に多い。
- (4) 婦人雑誌・教育雑誌（学年誌）・趣味や実用の雑誌・マンガ・読み物雑誌など幅広いジャンルの雑誌が読まれている。
- (5) 1950年代に創刊が増えた週刊誌がそれなりの割合を占めている。
- (6) 昭和34年の創刊を含め、その5年以内の創刊雑誌が多い。
- (7) 読み物雑誌の需要が多く、読み物は雑誌で読んでいたことが覗える。
- (8) 幅広い雑誌購読を支える社会的・地域的な条件が整っていたことが分かる。

3. 常呂町の人口がもっとも増えた時代で、幅広い雑誌の購買層がありました

下の表は、常呂町の世帯数・人口の推移：「町勢要覧」から抜粋したものの

年	昭和25	昭和28	昭和30	昭和32	昭和34	昭和36
世帯数	1,510	1,614	1,717	1,788	1,968	1,857
人口	8,626	9,463	9,705	10,190	11,668	11,727

	昭和38	昭和40	
世帯数	1,695	1,962	(戸)
人口	11,242	9,123	(人)

- ①人口のピークは昭和36年から昭和38年で、昭和40年以降は減少に転じます。この人口増加には子どもの増加も含まれ、人口増加は雑誌を購読する基礎、活力となったと考えられます。
- ②世帯数は大人数家族から昭和40年頃から世帯当たりの人数が減少していきます。

4. 戦後15年近く経ち、所得が向上し、雑誌の購買力が高まりました

次の表は、「内閣府調査：昭和30年代の所得データ」から〈北海道分〉を転載したもの

(円)

	昭和31	昭和32	昭和33	昭和34	昭和35
雇用者所得	267,005	302,825	320,711	352,913	388,932
県民所得	430,820	515,254	544,954	604,259	673,825

	昭和36	昭和37	昭和38	昭和39	昭和40
雇用者所得	439,942	502,479	592,494	669,250	778,133
県民所得	772,321	851,898	1,015,931	1,099,533	1,250,693

*雇用者所得：個人の所得水準を表す（農漁業者は含まない）

*県民所得：企業利潤なども含んだ各都道府県の所得水準を表す

- ①昭和30年以前の統計はありませんが、昭和31年以降毎年雇用者所得・県民所得ともに順調に増加をしていきます。
- ②所得が伸び、余裕が生じることで、生活必需品以外の楽しみや教養や娯楽にも目を向けることができるようになり、雑誌の購読につながっていると考えられます。

5. 雑誌のタイトル数が予想外に多いです

購読対象と週刊誌・月刊誌その他とのタイトル数を表にすると次の通りです。

*タイトル不明分を除く

刊行頻度	対 象			
	幼年～少年	青 年	成 人	計
週刊誌（隔週含む）	2	0	21	23
月刊誌その他	44	3	90	137
計	46	3	111	160

①「売上台帳」に記載されている雑誌名を1つずつ『出版年鑑1960年版』を基本に確認しました。60年以上前の昭和34年、そして小さな町の文具店で160タイトルもの雑誌が読まれていたことは驚きです。

②月刊誌その他と週刊誌との割合は、85.6%対14.4%。

成人対象雑誌と幼年・少年・青年対象雑誌との割合は、69.4%対30.6%。

注：『出版年鑑1960年版』（昭和35年5月発行：出版ニュース社）の「第1編8雑誌」では「週刊雑誌の急激な進出増加による影響」で、「月刊と週刊誌の部数比逆転」と解説しています。（資料2）

6. 婦人雑誌・教育雑誌（学年誌）・趣味や実用の雑誌・マンガ・読み物雑誌など幅広いジャンルの雑誌が読まれています

(1) 婦人雑誌：販売部数

	タイトル	3月	4月	5月	計	備考
1	主婦と生活	1	16	20	37	四大婦人雑誌 実用的な生活情報
2	主婦の友	3	7	17	27	
3	婦人生活	7	24	29	60	
4	婦人倶楽部	4	23	25	52	
5	婦人公論	2	20	20	42	女性・一般
6	婦人画報		2	3	5	女性・一般
7	それいゆ			1	1	女性・教養
8	夫婦生活			1	1	女性・一般
9	婦人之友	1			1	女性・一般
10	暮らしの手帖	1	29	4	34	総合生活 季刊
11	装苑	1	10	9	20	服飾
12	装苑増刊			1	1	服飾 不定期
13	女性教室			1	1	服飾・洋裁 ラジオテキスト
14	ドレスメイキング	1	3		4	服飾
15	新婦人	1	2	1	4	生け花・生活
16	スタイル	1	1		2	服飾
17	服装		1	1	2	服飾
18	若い女性	1	15	17	33	女性・一般
19	週刊女性	14	36	32	82	女性・一般 週刊
20	女性自身	11	31	41	83	女性・一般 週刊

①婦人雑誌は、雑誌全体の12.5%を占めています。

②婦人雑誌の主力は圧倒的に「月刊誌」です。

③出版業界で使われていた「実用的な生活情報が詰まっている四大婦人雑誌」の気持は常呂町でも同様で、これらに続き、「婦人公論」「若い女性」も好まれていました。

④婦人雑誌が好まれていた大きな理由に「付録」の多さ・実用性があります。

この付録について、『出版年鑑1960年版』では「付録の内容」（資料3）で説明しています。

- ⑤山田広子さんが「付録合わせ」作業の大変さを語っていますが、雑誌を輸送していた国鉄が昭和34年に、「雑誌の輸送問題」（資料4）として、「婦人雑誌の付録の重量制限とサイズの規制」をする改正を行い、児童雑誌も同様の規制改正がありました。このことから、婦人雑誌と付録との組み合わせが重要だったのかを物語っています。
- ⑥婦人雑誌の中で、服飾（洋裁・ファッション）を内容とする雑誌が6誌あります。その他の婦人雑誌も少なからず服飾に関する内容を含んでいたため、服飾は女性にとって大切な分野だったことが改めて分かります。
- ⑦戦後、常呂町での「洋裁」が定着していった歩みを簡易年表で紹介します。昭和36年に生徒数の減少により技芸学校が廃止されますが、一定数の希望者がいたため、常呂高校の家庭科がその役割を果たしていたという時代背景がありました。山田広子さんのお話でも触れていますが、戦後すぐはものがない時代ということもあり、洋服は買うものではなく自分で洋服を縫い、作るということが当たり前で自然だったという感覚がありました。



左の写真は、常呂高等技芸学校開校（昭和25年）直後に撮られた校舎前での集合写真です。生徒数の多さから、洋裁への人気の高さが分かります。

その後、「常呂町市街案内図」（昭和29年発行）には、呉服・洋品店が6店舗だったのが、「常呂町全戸案内図」（昭和33年発行）では、呉服・洋品店が7店舗（移転・新規）、仕立が新たに4店舗

記載されています。昭和20年代後半から30年代前半にかけては時代の分かれ目だったのかもしれませんが、ファッションへの関心度が高まりつつ、〈洋服を自分で作る〉から〈既製品を買う、仕立ててもらおう〉への移り変わであり、仕立ての店が一気に増えた背景には、昭和20年代に洋裁の技術を身につけた人たちが起業したことが考えられます。

「洋裁」に関する簡易年表

年月日	内 容
昭和24年8月24日	常呂高等技芸学校設立
1月10日	冬期洋裁講習会開催（農協） 北見女子洋裁技芸専門学校常呂分校として、農協会議室で1月から4月まで。受講者63人
昭和25年3月6日	常呂技芸学校開講式
昭和25年	常呂技芸学校岐阜分校開校
昭和25年から昭和27年	北見女子洋裁技芸専門学校常呂分校を農協本部・豊川・日吉・岐阜で開設
昭和27年1月10日	常呂技芸学校豊川分校開校
昭和28年1月12日	農協が豊川・岐阜に洋裁所開設
昭和29年	岐阜洋裁所継続
昭和36年	常呂高等技芸学校廃止、常呂高校に季節4年制の家庭科新設

(2) 教育雑誌・学年誌・受験雑誌：競合しながら一定の読者を得ていたジャンル

No	タイトル	3月	4月	5月
幼年				
1	こばと		2	3
2	めばえ	1	3	2
3	よいこ	2	6	4
4	たのしい幼稚園		2	2
小学生				
5	小学一年生		14	7
6	小学二年生		6	4
7	小学三年生		9	6
8	小学四年生		4	3
9	小学五年生		5	3
10	小学六年生		8	2
11	たのしい一年生		3	4
12	たのしい二年生		2	2
13	たのしい三年生		1	1
14	たのしい四年生		4	5
15	たのしい五年生		1	2
16	ひとみ		1	1
中学生				
17	中学生の友	1		3
18	中学コース	1		5
19	中学一年コース		6	6
20	中学二年コース		3	5
21	中学三年コース			1
22	中学時代一年生	1	3	3
23	中学時代二年生		3	2
24	ラジオ基礎英語	*各学年生徒分を学校が一括購入して配布		
25	中学英語時代	1	1	1
高校生				
26	高校時代	1	1	
27	高校英語研究	2		
28	蛍雪時代			1
29	ユースコムパニオン			1
計		10	88	79

(冊) *販売部数

- ①タイトル数が29あり、全体に占める割合は18.1%と高い割合を示しています。
- ②販売部数は新学期の4月がもっとも多く88冊あり、4月の全販売部数751冊に対して11.7%を占めています。
- ③雑誌購読を支える小学生の数は、分かる範囲では次の表の通りです。統計がない学校もありますが、昭和34年から36年頃にかけて児童数が増えています。

この傾向は、どの学校にも当てはまり、中学校でも同様と考えられます。

- ④読者を学年単位で絞る「学年誌」が成り立つ基本は子どもの数の多さです。また、学年誌は、娯楽と学習がセットになっていたため、〈教育のため〉という親が子どもに買い与えやすい条件を備えていたともいえます。

常呂町の小学生：児童数の推移（記念誌・学事報告から抜粋）（人）

	昭和25	昭和28	昭和30	昭和32	昭和34	昭和36
常呂小	596	584	626	715	798	771
錦水小	155	150	159	183	202	186
富丘小	92	102	108	120	120	101
福山小	58		64	74		
吉野小	60	46	50	59	60	38
登小		31	42	57	61	52

	昭和38	昭和40
常呂小	669	667
錦水小	145	97
富丘小	71	51
福山小	77	65
吉野小	27	19
登小	37	28

*川沿小・日吉小は、統計なし



上：昭和37年7月、常呂駅前で常呂小学校6年生の修学旅行出発式。松・竹・梅3クラス、それぞれ45人以上という児童数でした。見送りの人の多さも分かります。

(3) 趣味や実用の雑誌：写真・スポーツ・映画の人気

No	タイトル	3月	4月	5月	内容
1	アサヒグラフ	3	14	8	写真誌
2	アサヒカメラ	1	2	1	写真・カメラ
3	囲碁の友		1		囲碁
4	囲碁			2	囲碁
5	囲碁クラブ	1			囲碁
6	映画ストーリー	3	1	1	映画
7	栄養と料理	2	3	2	料理
8	映画評論		3	2	映画
9	オートバイ	1	1	2	オートバイ
10	音楽の友	3		2	音楽
11	カメラ毎日	1	1	1	カメラ・写真
12	近代映画			1	映画

13	芸術新潮			4	絵画・美術
14	航空時報	1	1	1	航空機
15	サンケイカメラ		1		写真・カメラ
16	写真工業		1		写真・カメラ
17	写真サロン		1	2	写真・カメラ
18	初歩のラジオ			1	ラジオ製作
19	スクリーン	1	2	1	映画
20	相撲		6	3	相撲
21	短歌		1	1	短歌
22	ダンスと音楽	1	1		ダンス・音楽
23	電波科学	2	3	1	電気工作
24	日本カメラ	1			写真・カメラ
25	ホトトギス		1		短歌
26	毎日グラフ			1	写真誌
27	無線と受験	2	1		アマチュア無線
28	モーターマガジン	1	2		自動車
29	モーターファン	5	4	5	自動車
30	模型とラジオ		1	1	科学・工作
31	週刊読売スポーツ			1	スポーツ全般
32	週刊ベースボール	26	31	31	野球
33	週刊野球			2	野球
34	週刊スポーツマガジン			1	スポーツ全般

- ①全体のタイトル数は34で、雑誌全体の21.3%を占め、婦人雑誌でも触れましたが、雑誌に求める役割が生活情報や趣味を満足させるための情報であることが分かります。
- ②タイトル数をもっとも多い分野は、「写真・カメラ」で8誌あり、次いで「スポーツ（相撲・野球含む）」の5誌と「映画」4雑誌と続きます。
- ③昭和30年代中頃の常呂町におけるスポーツや文化活動などと雑誌との相関を照らし合わせると当時の様相の一端が分かるかもしれません。

ア. 相撲に関して：相撲人気とテレビ観戦・興業：

左下の写真は、昭和30年代中頃の岡久薬店の店頭です。店頭には「当店で買い上げ…東京大相撲…テレビ機で常呂テレビ劇場」の貼り紙がります。当時を知る住民から、岡久薬店の裏側に当たる場所



にあった常呂劇場の舞台にテレビを置いて町民に見せていたとの証言があり、岡久薬店で一定額の買い物をするとテレビで相撲観戦ができる権利があったことを示しています。相撲人気とテレビの普及初期ならではのエピソードです。



左の写真は、昭和30年7月7日、小高神社境内（現中央児童公園）で興業を行った東京大相撲です。横綱・鏡里、大関・大内山一行の巡業で、勸進元は山田憲一（山田芳夫氏の兄）と黒川武氏。当時の相撲人気を伝える写真です。

イ. テレビの普及に関して：ラジオからテレビへの過渡期

もっとも古いテレビの記録は、「昭和32年 テレビ放送受信（斉藤吉明、札幌の電波を受信）（共立百年史）」で、翌33年11月3日に「常呂小学校にテレビを取り付ける（常呂小百年史）」、昭和36年4月には、「網走市天都山と北見市緑が丘のテレビ中継放送所設置、NHK北見放送局が「JOKP・TV」としてテレビ総合の放送開始（「NHK北見の放送五十年」）」の記録があります。

NHKによるテレビの大相撲放送は昭和28年5月から始まりましたが、昭和30年代中頃の常呂町ではテレビの普及率は低く、ラジオで相撲放送を聴くのが一般的だったと思われます。



（注：「広報ところ」5月号では、昭和34年4月12日、ラジオ普及率100%達成、常呂町有線放送施設10周年記念として式典と「第9回NHKゆきげ祭り」を常呂小学校で行ったことを伝えています）

左の写真は、昭和27年12月に完成した常呂村ラジオ共同聴取施設で、略称の「TRK」と呼ばれていました。常呂町農協が昭和25年1月から進めてきた、NHKラジオ放送と農業に関する情報・ローカルニュース・公共機関の広報周知・教育情報を提供する媒体で、当初農協事務所に放送機器を備え、昭和25年に土佐・東浜・富丘・岐阜・吉野と試聴地区を広げ、昭和27年12月に専属職員を採用してTRKを立ち上げ、29年には常呂漁協も加わりました。その後、町内全域がラジオと情報聴取範囲となり、昭和34年にラジオの普及率1000%となりました。テレビが普及するまでの間、このTRKが果たした役割は大きなものがありました。

（注：昭和25年3月21日に、常呂劇場から浪曲の中継放送、昭和27年12月31日に町長が年末のあいさつ放送、昭和35年3月1日に独自番組「この人をたずねて」で樺太アイヌ語話者・藤山ハルさんをゲストにお祝いの歌・ムックリ・トンコリ演奏の放送、などの記録があります）



左の写真は、昭和30年代前半の弁天地区で、とても高く上げているテレビのアンテナが数本見えます。

テレビの普及率は、昭和37年で「621戸/全戸数の32.3%（豊川百年記念誌）」、昭和39年には「1,366戸/77.7%昭和37年の2倍に（同誌）」となり、昭和38年4月発行の常呂

町文化連盟機関紙「新壜 第2号」のエッセイ「まず音楽を」に〈テレビに切りかえてみると相撲の放送〉の記述があり、昭和30年代後半にはテレビで相撲を観戦することが珍しくない時代になったことが分かります。

ウ. 野球に関して：野球人気の歴史性と広がり

もっとも古い記録は、「大正11年、野球部が…初めてできた。私はショートだった（常呂小学校八十周年のあゆみ）」と「大正9年～11年に日吉尋常小学校で初代校長が野球を教えた（日吉小学校開校80周年記念誌）」の記述です。

100年も前の常呂村で、中心地と外れの小学校で同時期に野球の歴史が始まったことは、それだけ野球が魅力あるスポーツだったことを意味します。

それから時代は進んで昭和21年7月に、「常呂軟式野球連盟が常呂小学校グラウンドに野球用バックネット1基寄贈（常呂小学校学事報告）」、同じ月に北海道新聞主催の全北見少年野球大会に常呂小学校野球チームが出場（同報告）、9月には「常呂小学校の少年団分団（町内会）対抗野球大会：弁天優勝（同報告）」の記録があり、戦後すぐに野球大会を支える組織があり、小学校の町内対抗試合ができるほどに普及していたことが分かります。

翌年からは、常呂小学校のグラウンドが野球大会の会場となり、春のグラウンド開き大会から常呂神社祭に絡めた職域野球大会など年間を通して野球大会が開催されました。以後、野球は小学生から中高生、町内の企業や団体を含め、盛んになっていきます。

野球の雑誌が読まれるのは、当時の野球人気は今とは比べものにならないくらい親しみのあるスポーツであり、プレイしても観戦しても大勢が楽しめる娯楽に近いものだったからかもしれません。





前ページと左の写真は昭和35年、常呂小学校グラウンドで行われた職域対抗野球大会のひとつです。

写真に写っているチームは「農協」や「大沢木材」など7チーム。他にも職域のチームがあったことは容易に想像でき、観客の多さが野球人気を物語っています。

注：常呂図書館のデータベース（HP公開）に「常呂における野球普及年表」があり、昭和43年までの動きを写真や各種資料を添えて紹介していますが、野球はもっとも人気のある「するスポーツであり、観戦して楽しむスポーツ」であったことが分かります。

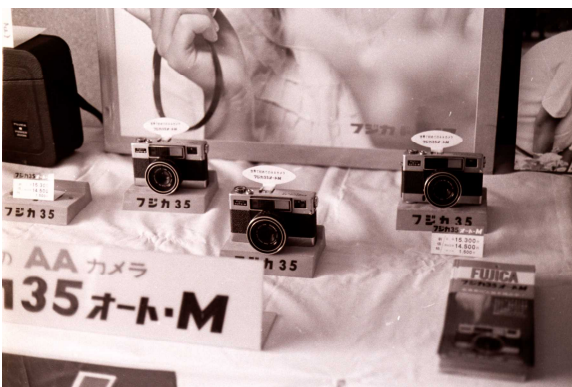
エ. 写真・カメラ雑誌について：カメラと写真撮影の大衆化

昭和36年11月の中央公民館落成・開館とともに発足した「常呂町文化連盟」の機関誌「新墾（にいはり）」の第1号（昭和37年11月）には、当時の加盟団体・サークルを次のように紹介しています。

- ・上田流尺八道同好会
- ・日本舞踊藤間流常呂後援会
- ・常呂町民謡協会
- ・常呂バレエ後援会
- ・箏萩会（琴）
- ・オホーツク画会
- ・常呂ピアノ教室
- ・北潮会（写真）
- ・常呂写友会（写真）
- ・常呂LP愛好会（音楽鑑賞）
- ・蛙声会（俳句）
- ・人形劇サークル
- ・裏千家小野社中
- ・裏千家杉江社中
- 池坊小野社中
- ・日本生花司松月堂古流山崎社中
- ・常呂町菊花同好会

写真・カメラの愛好者サークルは、「北潮会」と「常呂写友会」の2つがあり、昭和29年から始まった常呂町文化祭には、展示部門「書道・絵画・写真・生花・工作・菊花」などの一つとして作品を出品・展示していました。

写真・カメラ雑誌は、愛好者同士の技術を高め合うテキストとしても活用されたことがうかがえます。



常呂図書館には、昭和30年代に撮った保育園や小学校の行事（お遊戯会や遠足、運動会）など家族ぐるみや農作業、地域の行事などの写真が数多く寄贈され、所蔵・デジタル化保存しています。社会経済の発展とともにカメラが買えるようになり、写真を撮ることが身近になってきた証です。

左の写真は、高橋カメラ店に飾っていた昭和37年発売の「フジカ35オートM」。カメラの

機能が進化し、写真を撮ることがより簡単で、身近になっていきました。大衆化が進んだ時代ともいえ、サークル活動の活性化、雑誌購読にもつながっていました。

オ. 映画雑誌について：町内での映画館事情



町内には映画館は2館あり、常呂劇場（昭和11年～35年11月：火災で焼失）は、映画上映の他に各種公演・興業会場として親しまれ、中央館（昭和27年9月～31年7月）は常呂シネマ（昭和31年8月～43年）に引き継がれ、映画上映が中心でした。

左の写真は、常呂駅前の方角にあった常呂劇場の上映映画の案内看板（昭和35年2月）。

昭和33年8月号の「広報ところ」に、7月23日付けで「映画館の騒音規制を決めた」ことを伝えています。内容は、映画館から流れる広告の放送がうるさいため、上映中の中止、上映前の時間規制、音量規制などです。それだけ、映画館が賑わい、人を呼び寄せていたのかもしれませんが。

昭和30年代中頃は映画産業の最盛期で、そのこともあって映画雑誌が好まれていたと思われます。

カ. マンガ雑誌：月刊誌中心と少年対象週刊誌のスタート

購読対象別のマンガ雑誌のタイトル数は次の表の通りです。

刊行頻度	対 象		計
	幼年～少年	成人	
週刊誌（隔週含む）	2	1	3
月刊誌その他	13	2	15
計	15	3	18

①幼年・少年・少女対象のマンガ雑誌は月刊誌中心ですが、昭和34年に「少年サンデー」「少年マガジン」が相次いで創刊します。この表にある週刊誌はその2誌です。

（注：昭和37年には、少女向けの週刊誌「少女フレンド」「マーガレット」が創刊し、昭和43年には、「少年ジャンプ」「少年チャンピオン」が創刊します。10年足らずで少年少女向けのマンガ週刊誌が主流となっていきます）

②幼年・少年・少女対象の月刊誌はマンガがメインですが、読み物や実用的な情報も含む総合誌の面がありました。それに対して、週刊誌はマンガに特化してスタートしています。

③下の表からは、少年・少女それぞれを対象とした月刊雑誌が充実し、固定ファンを持っていたことが分かります。

③マンガ雑誌の内訳は次の表の通りです。

（冊）

No	タイトル	3月	4月	5月	計
幼年・少年					
1	おもしろブック		1	2	3
2	少年		4	3	7

3	少年画報		2	6	8
4	日の丸		3	2	5
5	ぼくら		2	4	6
6	冒険王		3	4	7
7	漫画王		1		1
8	りぼん		9	6	15
9	なかよし		4	4	8
10	少女クラブ		9	9	18
11	少女ブック	1	4	4	9
12	月刊少女		6	6	12
13	ひとみ		1	1	2
14	少年サンデー	1	2	1	4
15	少年マガジン		2	2	4
成人					
16	痛快ブック		1	1	2
17	漫画読本		2	3	5
18	週刊漫画 TIMES	6	9	5	20
計		8	65	63	136

キ. 読み物雑誌：バラエティに富んだ小説が魅力

読み物雑誌は次の表の通りですが、芸能ニュースを扱う雑誌も含まれています。

(冊)

No	タイトル	3月	4月	5月	計
1	オール読物	11	6	5	22
2	面白倶楽部	3	4	4	11
3	講談倶楽部	1	1		2
4	小説倶楽部	3	4	5	12
5	女学生の友		1	2	3
6	文学界		1		1
7	平凡	6	2	12	20
8	宝石			1	1
9	明星			8	8
10	読切傑作クラブ		2	5	7
11	読切倶楽部	4	4	7	15
12	小説新潮	20	4	4	28
13	週刊スリラー		1	1	2
計		48	30	54	132

①読み物を中心とする雑誌は、「女学生の友」を除くと青年から成人対象の12誌であり、青年・成人対象の雑誌全体114冊に占める割合は、10.5%となります。

この割合、購読部数が人口に対する割合として高いのか低いのかは判断できません。

②読み物の中心は、純文学雑誌の「文学界」を除き、大衆小説（中間小説）が圧倒的

に多いの特徴です。

③当時、月刊誌の定価は100円から130円でした。この金額でたくさんの小説家が書く数多くの小説を毎月楽しめるというのは、小説好きのおとなには満足できる媒体だったと想像できます。

④図書館もなく、単行本の単価を考えると読み物雑誌はお得感があり、小説の楽しみ方は読み物雑誌が一般的だったとも考えられます。

開進堂の当座帳では、小説の単行本は、当時ベストセラーだった「人間の条件」(五味川純平・著)他数点と文学全集がそれぞれ数冊の売上でした。

(4) 昭和34年の創刊を含め、5年以内の創刊雑誌が多い
：雑誌の勢いがあり、雑誌は人々の欲求に依っていた

昭和30年から34年に創刊した雑紙の一覧表です。

No	タイトル	創刊年	対象
月刊誌			
1	こぼと	1958	幼年 (4)
2	たのしい幼稚園	1956	
3	よいこ	1956	
4	めばえ	1959	
5	たのしい一年生	1956	小学生 (9)
6	たのしい二年生	1957	
7	たのしい三年生	1957	
8	たのしい四年生	1957	
9	たのしい五年生	1957	
10	なかよし	1955	
11	ひとみ	1958	中学生 (3)
12	ぼくら	1955	
13	りぼん	1955	
14	中学英語時代	1957	
15	中学一年コース	1957	青年 (3)
16	中学二年コース	1957	
17	若い女性	1955	
18	若い生活	1959	成人 (12)
19	若人	1955	
20	教育技術	1959	
21	月刊日本	1958	
22	現代教育科学	1959	
23	航空時報	1959	
24	裏窓	1956	
25	新婦人	1955	
26	時の窓	1958	
27	母と子	1955	

28	服装	1957	
29	モーターマガジン	1955	
30	模型とラジオ	1955	
31	経済セミナー	1957	
週刊誌			
32	少年サンデー	1959	小学生
33	少年マガジン	1959	(2)
34	週刊東京	1955	成人
35	週刊読売スポーツ	1959	(14)
36	週刊実話特報	1959	
37	週刊ベースボール	1958	
38	週刊漫画 TIMES	1956	
39	週刊女性	1957	
40	週刊明星	1958	
41	週刊野球	1959	
42	週刊現代	1959	
43	週刊新潮	1956	
44	週刊文春	1959	
45	週刊スリラー	1959	
46	週刊スポーツマガジン	1959	
47	女性自身	1957	
不定期			
48	週刊サンケイ別冊	1959	成人 (1)

- ①昭和34年を起点として5年以内の創刊雑紙が48誌あり、雑紙全体160誌の30%を占めています。
- ②月刊誌を除き、週刊誌だけに限ると5年以内の創刊誌が23誌の中、16誌：69.6%を占めています。
- ③週刊誌は、昭和34年の創刊が9誌、3年以内では4誌増えて13誌あり、いかに週刊誌が急速に購読者を増やしていたのかが分かります。(資料2参照)
- ④この表にある週刊誌の半数以上は、現在または最近まで発行しており、昭和30年代に数多く発行された週刊誌という形態が長く社会に受け入れられてきたことが分かります。

7. 趣味の広がりや社会の変化と雑誌：町内の文化活動の広がり活動拠点

- (1) 囲碁、短歌、音楽、料理、アマチュア無線、自動車、電気工作など、それぞれの購読部数は少ないけれど、そうした雑紙の存在は、趣味の広がりに関わりがあるのかもしれない。
- (2) 先に、常呂町文化連盟発足時の加盟団体・サークルを紹介しましたが、加盟サークルは年を追うごとに着実に増えていきます。

文化連盟機関誌で紹介している追加加盟団体

- * 昭和38年4月「新壘第2号」
 - ・読書サークル
 - ・わかくさ（詩）
 - ・常呂うたう会（合唱）
 - ・手芸サークル
- * 昭和39年7月「新壘第3号」
 - ・書道サークル
 - ・柏葉宿（絵）
- * 昭和40年3月「新壘第4号」・松石会（石）
- * 昭和40年12月「新壘第5号」

(3) また、さまざまな団体・サークルの活動拠点となる中央公民館の建設促進・支援として、昭和33年6月28日、常呂婦人会が公民館設立準備基金造成の演芸大会を昼夜2回常呂劇場で開催し、超満員の盛況となり、入場料収益37,000円を町に寄付する（広報ところ）という画期的な活動もあり、昭和36年11月2日に中央公民館が落成します。



上の写真は、公民館設立準備基金造成の演芸大会で活気が伝わってきます。



左の写真は、昭和35年2月に行った「漁村演芸の夕べ」で、常呂漁業協同組合10周年記念の催しです。会場は常呂劇場で、内容は、常呂漁協婦人部、水友会の芸能発表、バンドを伴奏にした歌、舞踊など、多彩なプログラムでした。

公民館の落成・開館は、文化団体の自主的な活動の場・拠点として活性化し、各地域の公民館を束ねる会教育施設として、大きな役割を担っていきました。

昭和30年代中頃という時代は、所得水準が上がり、人口が増え、子どもたちの数が増え、文化・スポーツなどの活動を自ら行う人たちが増え、ラジオ試聴の充実、皇太子殿下のご成婚パレード中継をきっかけとしたテレビの普及などを背景に、余暇の楽しみ、趣味の技術向上、ファッションへの関心、教育への投資、生活情報の取得など雑誌がもたらす情報が日常的に必要とされてきた時代でもありました。

それぞれの雑誌が持っている個性や有益性（娯楽・情報・知識・教養・技術・社会性など）が当時の人たちが持っていた前向きな欲求・エネルギーに応える媒体だったことが山田開進堂という町の小さな文具店の断片的な資料からうかがい知ることができます。

注：写真は、すべて常呂図書館所蔵で、北海道立デジタルライブラリー公開写真です。

資料 1

山田開進堂の雑誌販売状況（昭和34年3月15日から5月31日まで） 1959/3/15-5/31

* 出版に関するデータは『出版年鑑 1960年版』を最優先とし、次いで道立図書館作成「所蔵雑誌創刊号目録」（平成24年3月）を、最後にインターネット上の情報を参考とした。

No	雑誌タイトル	頻度	カテゴリー	定価：円	出版社	創刊	休刊	販売冊数(冊)		
						月または号	不明・継続	3月	4月	5月
1	アサヒグラフ	月刊	写真・社会	230	朝日新聞社	1923	2000	3	14	8
2	アサヒカメラ	月刊	写真・カメラ	200	朝日新聞出版	1926	2020	1	2	1
3	囲碁の友	月刊	趣味・囲碁	100	誠文堂新光社	1952	1959		1	
4	囲碁	月刊	趣味・囲碁	100	誠文堂新光社	1951.7	2012.4			2
5	囲碁クラブ	月刊	趣味・囲碁	100	日本棋院	1954		1		
6	裏窓	月刊	娯楽	120	光文社	1956	1965			1
7	映画ストーリー	月刊	趣味・映画	150	雄鶏社	1952	1965	3	1	1
8	栄養と料理	月刊	料理・健康	100	女子栄養大学出版部	1935		2	3	2
9	映画評論	月刊	映画・趣味	120	映画出版社	1927	1975		3	2
10	オール生活	月刊	総合	80	実業之日本社	1951	1993	2		4
11	オートバイ	月刊	趣味・バイク	150	モーターマガジン社	1954		1	1	2
12	オール読物	月刊	小説	100	文藝春秋社	1930	2015.5	11	6	5
13	面白倶楽部	月刊	小説	130	光文社	1948	1960	3	4	4
14	おもしろブック	月刊	児童・マンガ	120	集英社	1949	1969		1	2
15	音楽の友	月刊	趣味・音楽	130	音楽之友社	1941		3		2
16	カメラ毎日	月刊	趣味・写真	200	毎日新聞社	1954	1985.4	1	1	1
17	カレント・オブ・ワールド	月刊	学習・英語	100	英通社	1924	不明	2		2
18	企業会計	月刊	経理・財務	155	中央経済社	1948				1

19	基礎英語	月刊	英会話・学習	30	日本放送出版協会	1945.11	1994.3	2	3	1
20	教育音楽	月刊	教育・教師	130	音楽之友社	1946.12	不明	2	4	2
21	教育科学	月刊	教育・教師	130	国土社	1951	2012			1
22	教育技術	月刊	教育・教師	130	小学館	1959	2022	4	6	10
23	近代映画	月刊	趣味・邦画	150	近代映画社	1945.12	2009.11			1
24	蛍雪時代	月刊	学習・受験	100	旺文社	1932				1
25	芸術新潮	月刊	アート・美術	190	新潮社	1950				4
26	月刊少女	月刊	マンガ・小説	140	光文社	1949	1963		6	6
27	月刊日本	月刊	政治・社会	100	講談社	1958		1	5	6
28	建築界	月刊	専門	100	理工図書	1952.11	1988.8			1
29	言語生活	月刊	日本語・随筆	70	筑摩書房	1951	1988		1	1
30	現代教育科学	月刊	教育・教師	120	明治図書出版	1959.3	2012.3	2		
31	高校時代	月刊	学習・学年	100	旺文社	1954	1964	1	1	
32	講談倶楽部	月刊	小説・講談	120	講談社	1911	1962	1	1	
33	航空時報	月刊	航空機	150	日本航空境界	1959.1	1973.4	1	1	1
34	高校英語研究	月刊	学習・英語	60	研究社	1925	不明	2		
35	子供の科学	月刊	小中・科学情報	95	誠文堂新光社	1924		1	2	2
36	こぼと	月刊	幼女	130	集英社	1958	1962		2	3
37	サンケイカメラ	月刊	趣味・写真	200	産業経済新聞社	1954	1959		1	
38	時事英語研究	月刊	英語・学習	90	研究社	1948	2001		1	
39	思想	月刊	哲学・社会	100	岩波書店	1921.1			1	
40	写真工業	月刊	写真・カメラ	200	光画社	1952.6	2008.12		1	
41	写真サロン	月刊	写真・カメラ	200	玄光社	1933	1961		1	2
42	主婦の友	月刊	婦人	140	主婦の友社	1917	2008	3	7	17
43	主婦と生活	月刊	婦人・生活実用	170	主婦と生活社	1946.5	1993.3	1	16	20
44	受験新法	月刊	法律・学習	110	法学書院	1951	2020		2	1

45	小説新潮	月刊	小説	100	新潮社	1947.9		20	4	4
46	少女ブック	月刊	マンガ・読み物	135	集英社	1949	1963	1	4	4
47	商店界	月刊	経営	100	誠文堂新光社	1946	2008			1
48	小学一年生	月刊	学習・学年	120	小学館	1925			14	7
49	小学二年生	月刊	学習・学年	120	小学館	1925			6	4
50	小学三年生	月刊	学習・学年	130	小学館	1925			9	6
51	小学四年生	月刊	学習・学年	130	小学館	1924	2012.2		4	3
52	小学五年生	月刊	学習・学年	130	小学館	1924			5	3
53	小学六年生	月刊	学習・学年	130	小学館	1924			8	2
54	少年	月刊	児童・マンガ	120	光文社	1946.11	1968.3		4	3
55	少年画報	月刊	児童・マンガ	120	少年画報社	1948	1971		2	6
56	小説の泉	月刊	小説	130	双葉社	1953	1999.3	1		
57	少女クラブ	月刊	小説・マンガ	130	講談社	1923	1962		9	9
58	小説倶楽部	月刊	小説	130	桃園書房	1948	1968	3	4	5
59	少年クラブ	月刊	児童・マンガ・読み物	130	講談社	1914	1962			2
60	初歩のラジオ	月刊	ラジオ製作	100	誠文堂新光社	1948	1992			1
61	女性教室：ラジオ	月刊	服飾・洋裁	60	日本放送出版協会	1950	1965			1
62	女学生の友	月刊	少女・小説・総合	120	小学館	1950.4	1977.12		1	2
63	新婦人	月刊	生け花・生活	160	文化実業社	1955		1	2	1
64	人物往来	月刊	政治・社会	100	人物往来社	1952	不明			1
65	スクリーン	月刊	趣味・映画洋画	150	近代映画社	1946.5		1	2	1
66	スタイル	月刊	服飾	150	スタイル社	1936.6	1959.5	1	1	
67	相撲	月刊	趣味・相撲	150	ベースボールマガジン社	1949			6	3
68	世界	月刊	総合	130	岩波書店	1946			7	1
69	装苑	月刊	服飾	180	文化出版局	1936.4		1	10	9
70	それいゆ	月刊	女性・教養	180	ヒマワリ社	1946	1960			1

71	たのしい一年生	月刊	学習・学年	130	講談社	1956.9	1963		3	4
72	たのしい二年生	月刊	学習・学年	130	講談社	1957	1963		2	2
73	たのしい三年生	月刊	学習・学年	130	講談社	1957	1963		1	1
74	たのしい四年生	月刊	学習・学年	130	講談社	1957	1963		4	5
75	たのしい五年生	月刊	学習・学年	130	講談社	1957	1963		1	2
76	たのしい幼稚園	月刊	学習・幼児	110	講談社	1956.11			2	2
77	短歌	月刊	趣味・短歌	100	角川書店	1954			1	1
78	ダンスと音楽	月刊	趣味・音楽ダンス	100	ダンスと音楽社	1932	1995	1	1	
79	中学生の友	月刊	学習	100	小学館	1949	不明	1		3
80	中学コース	月刊	学習・学年	100	学習研究社	1949	1999.3	1		5
81	中学英語時代	月刊	学習・英語	50	日本英語教育研究会	1957.5	廃刊	1	1	1
82	中学二年コース	月刊	学習・学年	100	学習研究社	1957.4			3	5
83	中学一年コース	月刊	学習・学年	100	学習研究社	1957.4			6	6
84	中学三年コース	月刊	学習・学年	100	学習研究社	1949.4				1
85	中学時代一年生	月刊	学習・学年	100	旺文社	1956	1964	1	3	3
86	中学時代二年生	月刊	学習・学年	100	旺文社	1956	1964		3	2
87	中央公論	月刊	総合	150	中央公論新社	1887		4	15	7
88	痛快ブック	月刊	マンガ・物語	100	芳文社	1953.9	1961.2		1	1
89	電波科学	月刊	電気工作	100	日本放送出版協会	1933	1985	2	3	1
90	時の窓	月刊	社会・政治	50	旺文社	1958	1960	1	1	
91	ドレスメーカー	月刊	服飾・趣味	180	鎌倉書房	1949	1993	1	3	
92	なかよし	月刊	少女・マンガ	140	講談社	1955			4	4
93	日本カメラ	月刊	趣味・写真	150	日本カメラ社	1950	2021.5	1		
94	母と子	月刊	家庭・母親	40	蒼生社	1955	不明	1		
95	ひとみ	月刊	少女・マンガ	130	秋田書店	1958	1961		1	1
96	日の丸	月刊	児童・マンガ	130	集英社	1953	1963.2		3	2

97	夫婦生活	月刊	一般	120	家庭新社	1949	1970年代		1	1
98	服装	月刊	服飾	180	同志社	1957.5	不明		1	1
99	婦人生活	月刊	婦人	170	婦人生活社	1947.5	1986.8	7	24	29
100	婦人公論	月刊	婦人	130	中央公論新社	1916		2	20	20
101	婦人倶楽部	月刊	婦人	150	講談社	1920	1988	4	23	25
102	婦人画報	月刊	婦人・生活	160	ハースト婦人画報社	1905			2	3
103	婦人之友	月刊	生活情報	100	婦人之友社	1903		1		1
104	文藝春秋	月刊	総合	110	文藝春秋	1923.1		3	12	7
105	文学界	月刊	小説	120	文藝春秋	1947.6	2008.12		1	
106	平凡	月刊	一般・小説	100	平凡出版	1945		6	2	12
107	保育とカリキュラム	月刊	保育	100	ひかりのくに	1952				2
108	宝石	月刊	推理小説	150	宝石社	1946	1964			1
109	法律時報	月刊	法律	140	日本評論社	1929			1	2
110	冒険王	月刊	児童・マンガ	100	秋田書店	1949	1983		3	4
111	ぼくら	月刊	児童・マンガ	130	講談社	1955	1969.1		2	4
112	ホトトギス	月刊	趣味・短歌	100	ホトトギス社	1897			1	
113	毎日グラフ	月刊	写真・社会	120	毎日新聞社	1948	1994			1
114	漫画読本	月刊	マンガ・エッセイ	100	文藝春秋社	1954.12	1970.8		2	3
115	漫画王	月刊	児童・マンガ	100	秋田書店	1952	1971		1	
116	明星	月刊	芸能・小説	100	集英社	1952.1				8
117	無線と受験	月刊	趣味・無線	100	情報通信振興会	1954	2018	2	1	
118	めばえ	月刊	幼児・学習	110	小学館	1959.1		1	3	2
119	モーターマガジン	月刊	自動車・趣味	135	モーターマガジン社	1955		1	2	
120	モーターファン	月刊	自動車・趣味	200	三栄書房	1947	1996	5	4	5
121	模型とラジオ	月刊	科学・工作	100	科学教材社	1955	1984		1	1
122	ユースコムパニオン	月刊	高校英語	60	旺文社	1951				1

123	よいこ	月刊	幼児・学習	120	小学館	1956	1995	2	6	4
124	幼稚園	月刊	学習・幼児	120	小学館	1932		2	10	4
125	洋装	月刊	男性服飾	150	洋装社	1949	2000	1		2
126	読切傑作クラブ	月刊	小説	130	双葉社	1951			2	5
127	読切倶楽部	月刊	小説	130	三世社	1951.3	1970.7	4	4	7
128	リーダーズダイジェスト	月刊	情報	70	リーダーズダイジェスト社	1946	1986		2	2
129	りぼん	月刊	少女・マンガ	140	集英社	1955.8			9	6
130	若い女性	月刊	女性	150	講談社	1955	1982	1	15	17
131	若い生活	月刊	青年・社会	75	日本社	1959.2	不明		1	
132	若人	月刊	少女・生活	70	学燈社	1955.5	1962		1	
133	経済セミナー	隔月	社会・経済	100	日本評論社	1957				2
134	タイトル不明：月刊	月刊							15	17
135	アサヒ芸能	週刊	娯楽	30	アサヒ芸能出版	1947		3	2	4
136	サンデー毎日	週刊	一般	30	毎日新聞社	1922		14	27	24
137	週刊東京	週刊	一般	30	東京新聞社	1955.8	1959.12	2	10	5
138	週刊朝日	週刊	一般	30	朝日新聞出版	1922		19	30	25
139	週刊読売	週刊	一般	30	読売新聞社	1952	2000	13	16	15
140	週刊読売スポーツ	週刊	スポーツ	30	読売新聞社	1959	1965			1
141	週刊サンケイ	週刊	一般	40	産業経済新聞社	1952	1988	6	26	9
142	週刊実話特報	週刊	娯楽	30	双葉社	1959.4			2	1
143	週刊ベースボール	週刊	趣味・野球	30	ベースボールマガジン社	1958		26	31	31
144	週刊漫画TIMES	週刊	一般・マンガ	30	芳文社	1956.11	不明	6	9	5
145	週刊女性	週刊	一般・総合	30	主婦と生活社	1957.3		14	36	32
146	週刊明星	週刊	芸能・小説	40	集英社	1958.7	1991.12		7	8
147	週刊野球	週刊	趣味・野球	30	博友社	1959.4	1959.6			2
148	週刊現代	週刊	一般	30	講談社	1959.4			1	1

149	週刊新潮	週刊	一般	30	新潮社	1956.2		10	32	24
150	週刊文春	週刊	一般	30	文藝春秋新社	1959.4			5	10
151	週刊スリラー	週刊	推理小説	30	森脇文庫	1959.5	不明		1	1
152	週刊スポーツマガジン	週刊	スポーツ	30	ベースボールマガジン社	1959.2				1
153	少年サンデー	週刊	児童・マンガ	30	小学館	1959.3		1	2	1
154	少年マガジン	週刊	児童・マンガ	30	講談社	1959.3			2	2
155	女性自身	週刊	女性・一般	40	光文社	1957		11	31	41
156	世界週報	週刊	政治・経済	50	時事通信社	1945	2007	2	3	4
157	タイトル不明・週刊	週刊							7	13
158	ジュリスト	隔週	判例法学	110	有斐閣	1951		1	2	3
159	日本週報	隔週	政治・外交	40	日本週報社	1945	不明	4	5	3
160	暮らしの手帖	季刊	総合生活	160	暮らしの手帖社	1948		1	29	4
161	週刊サンケイ別冊	不定期	一般	60	産業経済新聞社	1959.4				1
162	装苑増刊	不定期	服飾	180	文化出版局	1948				1

販売冊数 273 751 730

【資料編】

■資料2：週刊誌の発行部数が月刊誌を逆転

『出版年鑑1960年版』（昭和35年5月発行：出版ニュース社）の「第1編8 雑誌」では「●月刊誌と週刊誌の部数比逆転 …本年度の雑誌年鑑発行部数は、大幅な躍進をみせて、9億8,600万部と推定される。この数字は前年度に比べて実に2億万冊の増加である。これは明らかに週刊雑誌の急激な進出増加による影響であるが、このうち週刊雑誌の占める部数は5億2,000万冊、従って月刊雑誌は4億6,600万冊となつて、週刊雑誌52%に対する月刊雑誌ほか48%という比率になる。前年度においては週刊雑誌41%、月刊誌ほか59%であった比率が逆転したことになり、今まで過去においてなかった現象である」と概括している。

■資料3：婦人雑誌付録の内容

『出版年鑑1960年版』の「第1編8 雑誌」（同上）では、〈婦人雑誌〉について、〈婦人四誌は平穏なり〉と題して、『主婦の友』『婦人倶楽部』『主婦と生活』『婦人生活』四誌の均衡が続き、新しい雑誌の割り込みを許さない状況と〈婦人雑誌の付録〉を〈実用的な内容〉で、〈和洋裁もの、スタイルブック、小住宅関係、エチケット集、毛糸編み物、お産と育児書、結婚医学、家庭料理、子どものスタイルブック、美容手引き、電気製品紹介、手芸工作など題名だけみると毎年の繰り返し〉と解説している。

■資料4：国鉄による雑紙の付録の重量・大きさ制限改正

『出版年鑑1960年版』で触れている「雑誌の輸送問題」について抜粋すると、「雑誌の国鉄輸送は、〈雑誌特別運輸規程〉によって低運賃運送が行われているが、国鉄側では前年度において、付録並びに増刊号の超過重量及び乱発を防止し、合理的輸送をはかるため、規定の一部を改正する案を提出し…付録については…婦人雑誌のみ年4回に限り350グラムまで、その他はすべて250グラム以内とする…本年4月より実施するに至った。このため付録の多い婦人雑誌、児童雑誌、受験雑誌、大衆雑誌等は大冊付録や玩具的な付録がつけられなくなり、婦人雑誌では大体付録一冊、児童雑誌その他では、本誌つづり込み付録という苦肉策を立てた。また付録の大きさが本誌より大きくてはいけないことになり、A5を守っていた『主婦と生活』も他の同類3誌同様B5判にあらたまるに至った」と解説し、日本雑誌協会が児童雑誌の付録重量を婦人雑誌同様年3回、350グラムまで認めるよう国鉄に申請したとも解説している。